JTB ITS世界会議モントリオール大会2017 参加ツアー

デイリーレポート　#1

地元出身のガブリエラさんのバイオリンと歌声でITS2017は始まった

ITS WORLD CONGRESS 2017

Montréal | OCTOBER 29 - NOVEMBER 2

構成：杉沼浩司（日本大学生産工学部自動車工学リサーチセンター）

取材協力：(株)映像新聞社

(C)2017 Koji Suginuma and Eizo Shimbun

総会：「将来への準備を行うイベント」（Bhatt会長）

30日（月曜日）朝、ITS World Congress 2017のオープニングセレモニーが予定時刻からおよそ25分遅れで、ITS Americaの暫定CEOであったDavid St. Amant（ディビッド・サンアマント）氏の司会で始まった。フランス語圏のモントリオールだけあり、登壇するスピーカーたちは登壇するスピーカーたちは「ボンジュール」という挨拶で講演を始めていた。

今大会の実行委員長で、モントリオール市Roads and Transportation部門Director of InfrastructureのClaude Carette（クロード・カレット）氏が最初に登壇し、モントリオールへの歓迎の言葉を述べた。スマートシティとして発展を続け、375周年を迎えたモントリオール市がITS世界大会をホストすることに大変な意義がある、とカレット氏は述べた。

続いて、ITS Americaの理事長のChris Murray（クリス・マレー）氏にが、ITS Americaの理事会が満場一致で就任を承認したという、ITS Americaの新会長兼CEOのShailen Bhatt（シェイレン・バット）氏を紹介した。Bhatt氏がITS Americaの会長兼CEOとして公の場に紹介されたのはこの場が初めてとのことである。Bhatt氏は最近までコロラド州交通局長を務めており、それ以前はデラウェア州の交通局長だった経験も持つ、交通行政界のベテランである。Bhatt氏は「ITS世界大会は交通のプロ達が一堂に会する特別なイベントで、将来へ向けて準備するためのイベントでもある」と挨拶した。

ITS Canadaの会長兼CEOのChris Philip（クリス・フィリップ）氏も登壇し、ITS CanadaとITS Americaの深い親交と繋がりを改めて示した。

モントリオール市の交通責任者で、同市エグゼクティブコミッティーの委員であるAref Salem（アレフ・セイレム）氏は、近年ますます自治体レベルでの決定事項が増えてきており、モントリオール市が2016年にIntelligent Citu of the Yearに選定されることに繋がったとした。また同市は21世紀のスマートシティとして確実に地に足が付いていることを強調した。Salem氏はモントリオール市長の言葉を借り、「グローバルで成功するには

(C)2017 Koji Suginuma and Eizo Shimbun

まずローカルで成功しなければならない」、そして「私たちの街は生まれ変わった」とモントリオール市を讃えた。

米国運輸省（USDOT）交通政策担当副次官補のGrover Burthey（グロバー・バーゼイ）氏は、米国運輸省が発足以来50周年を迎え、新しい技術を積極的に取り入れることが成功に繋がり、安全で効率よく、かつ安価な交通が不可欠となる、と説明した。自動運転自動車は、自分で運転できない年配者の移動の確保や、排ガスの削減、事故の95%が人間の判断ミスなどによると言われている死亡事故を大幅に削減することにも役割を果たす可能性がある、と自動運転に期待を寄せた。Trump（トランプ）大統領は１兆ドルを交通のインフラ開発に当てる予算を確定したという。

モントリオール市が所在するケベック州からは同州運輸省大臣のAndre Fortin（アンドレ・フォーティン）氏がビデオで祝辞を述べた。ケベック州はITS世界大会を迎えるにあたり、モントリオール市に20万カナダドルの助成金を授与した、とFortin氏は述べた。

またオンタリオ州運輸省大臣のSteven Del Duca（スティーブン・デル・デュカ）氏もビデオで祝辞を述べ、併せてオンタリオ州トロント市内で自動運転自動車の試験走行の積極的に認めていることを紹介した。

ERTICO - ITS Europe 会長のCees de Wijs（ケース・デ・バイス）氏はERTICO - ITS Europe発足以来25周年を迎え、今後もITS間の協力、コネクテッド自動運転の開発、サービスとしてのモビリティに力を入れていく、と述べた。

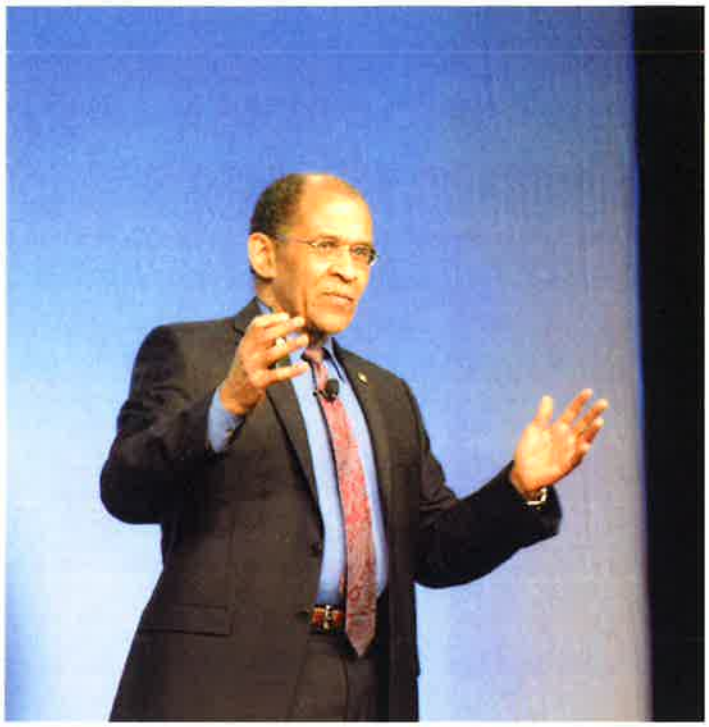
日本の警察庁の長谷川豊官房審議官は日本政府も積極的に自動運転などの課題に取り組んでいると流暢なフランス語も交えて挨拶した。

各国のITS関係者の登壇後、ITS功労賞（ライフタイムアチーブメント）の授与式が行われ、次の３氏が受賞し、殿堂入りを果たした。

受賞者	現職
Christer Karlsson（クリストファー・カールソン）氏	CEO, ITS Sweden
Datuk Ir. Hj. Ismail Bin Md Salleh（ダトゥク・イア・イスマイル）氏	Director General, Malaysian Highway Authority
Michael Duyle（マイケル・ドイル氏）	Econolite Group

(C)2017 Koji Suginuma and Eizo Shimbun

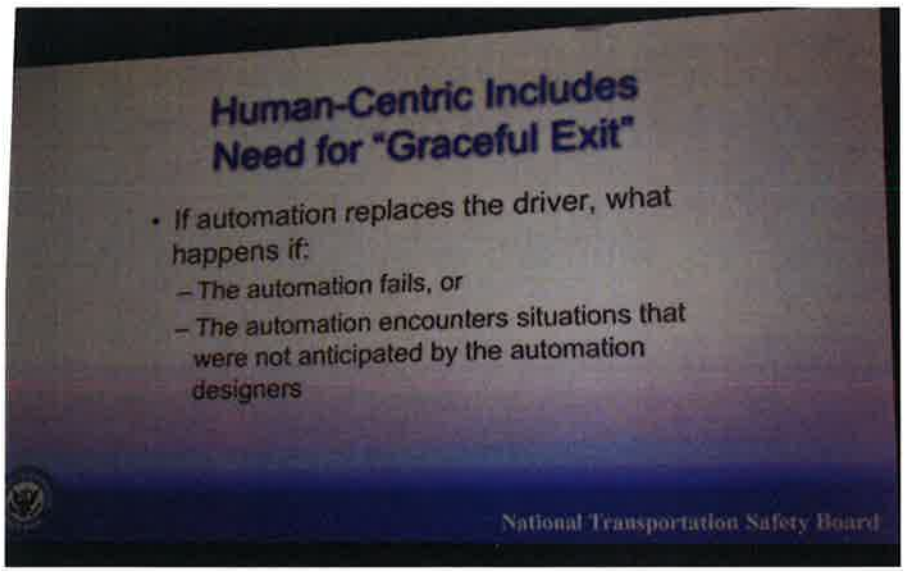
基調講演：自動運転特有の事故も(ハートNTSB委員)



自動運転特有の事故もありうるとした、NTSBのCHRISTOPHER HART氏

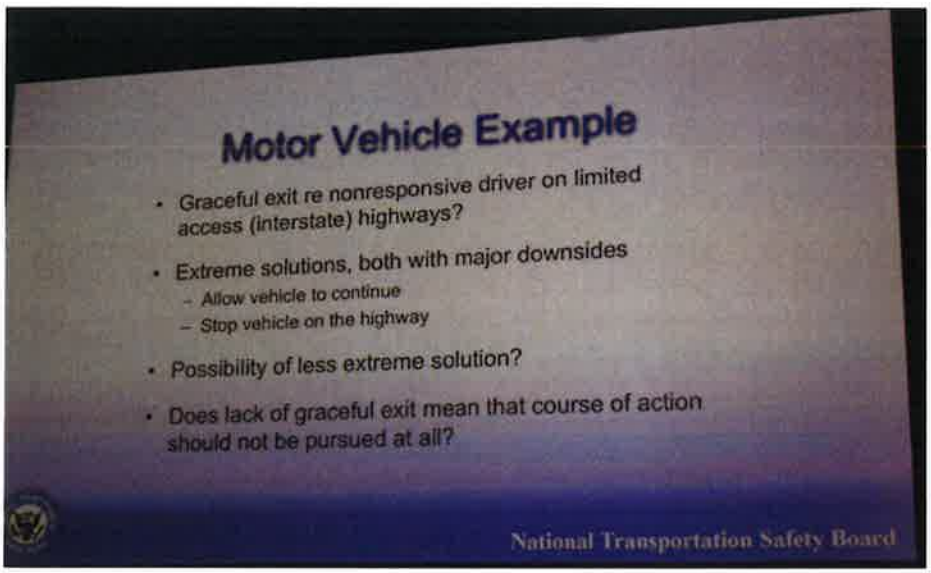
基調講演は、NTSB（National Transportation Safety Board = 米運輸安全委員会）のChristopher Hart（クリストファー・ハート）委員を招いて行われた。NTSBは、航空事故の他、運輸関連の重大事故の調査を担当する独立機関で、大統領に直属している。事故調査・原因分析の力量は世界随一と言われている。

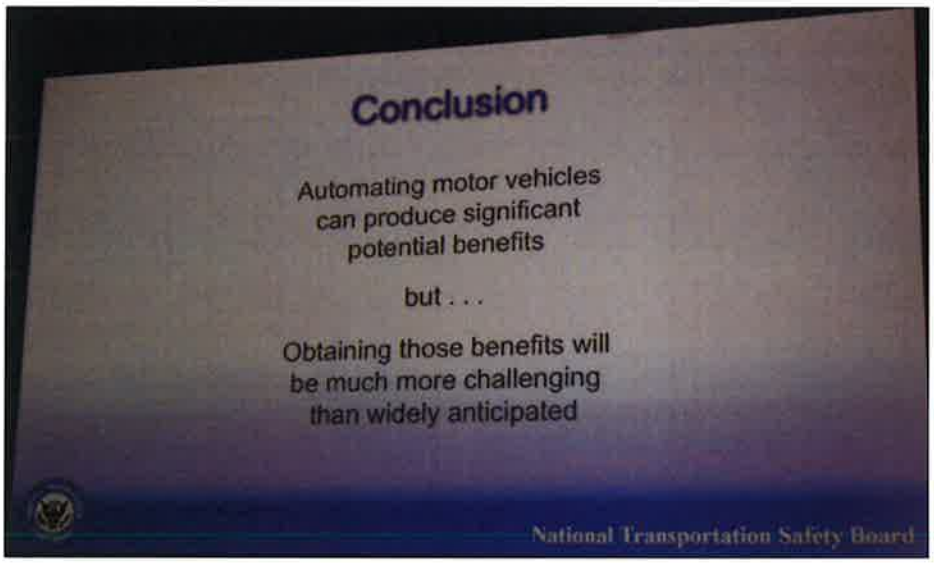
Hart氏は「自動運転は、(処理）ループから人間を除くことで、人間が犯すエラーを排除できる」という'定説'への挑戦を行った。現在、米国では年間3万7000人以上が事故死しており、自動運転化で事故死者数を大幅削減できるとの期待が強い。「しかし」とHart氏は言う。「もし、自動装置が故障したらどうなるか。もし、自動装置の設計者が想定しなかった事態に遭遇したらどうなるのか」として「Graceful Exit（注：管理下にあるプログラム中断。異常事態に遭遇して、突然中断するのに対比した表現）の確保」を求めた。「（交通量の多い）インターステート・ハイウェイで、自動装置の能力以上のこと・設計者が想定していないことが起こったら、車はどうするのか。そのまま進んでも、大きな事故に至ろう。車線上で急停車しても、大事故となる」と、自動運転機器の能力上の事態に対して、「Graceful Exit」を行うことを求めた。



同氏は「これだけ自動化しても、航空機でパイロットが必要なのはなぜか。それは、パイロットでないとGraceful Exitできないからだ」と自動機器では能力を越えると突然動作停止や作業放棄に至る、として、自動操縦の歴史が長い航空界ですら人間の介入がまだ

(C)2017 Koji Suginuma and Eizo Shimbun





必要であることを紹介した。　また、「トロッコ問題」として知られる、全く関係ない歩行者を巻き込みうる判断にある倫理的問題も、社会的合意が得られていないとした。

最後に、「自動運転車両の導入は、大きな利点が見込まれる半面、この利点を実現するにはこれまで考えられてきたよりも困難な道を通らなければならないだろう」として講演を終えた。

(C)2017 Koji Suginuma and Eizo Shimbun

確かに変わった総会

昨年、メルボルンで開催されたITS世界大会にて、当時のITS America 会長であるRegina Hopper氏は、「（来年のイベントは）全く違ったものとなる」と、フォーマットの大変更を明らかにしていた。Hopper前会長の指摘通り、「壇上に並んでテープを着る」ことや「球体を次々に送る儀式」は、今年は行われなかった。スピーチやパネル・ディスカッション以外に行われたのは、冒頭の演奏（表紙写真）と、功労者の殿堂入りが発表されたのみである。儀式を廃するとの意味で、絞り込まれた総会であったと言えるだろう。

Hopper会長、ITS2017大改革を示唆

10日午後、映像新聞の取材に応じたITS AmericaのRegina Hopper会長は、ITS2017のイベントは「全く違ったものとなる」と断言した。「もう、壇上に並んでテープを切ったり、球体を次々に送るような儀式は終わり」と、これまで「恒例のイベント」とされてきたものを断ち切る考えを明らかにした。その上で「ミュージックイベントに来るような、楽しいイベントになる」とした。また、基調講演の構成も変更することも示唆した。

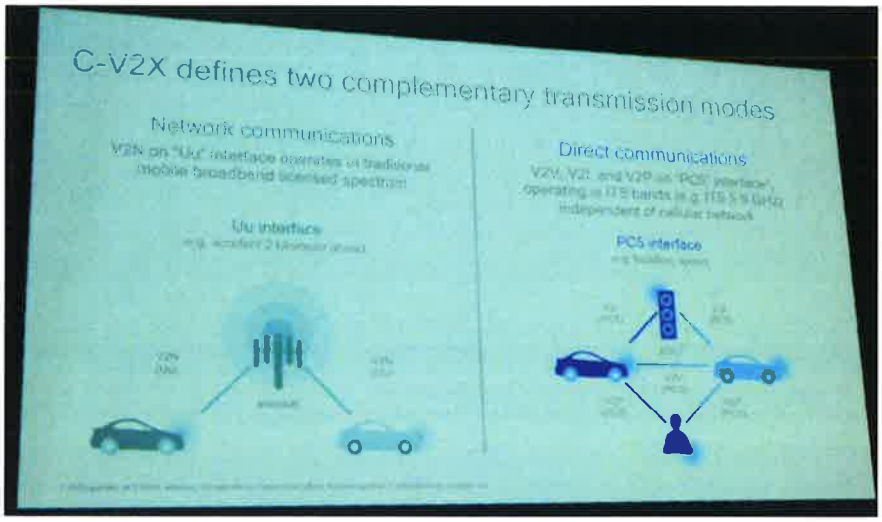
Hooper会長は、CBS放送系列局でホワイトハウス担当記者を務めた政治通で、放送業界最高の栄誉とされるエミー賞を受賞している。放送事業から離れた後、ワシントンDCにて、複数の業界団体幹部を務め、CEO Update誌とThe Hill誌から「業界団体トップCEO」と「トップ・ロビースト」に選ばれている。

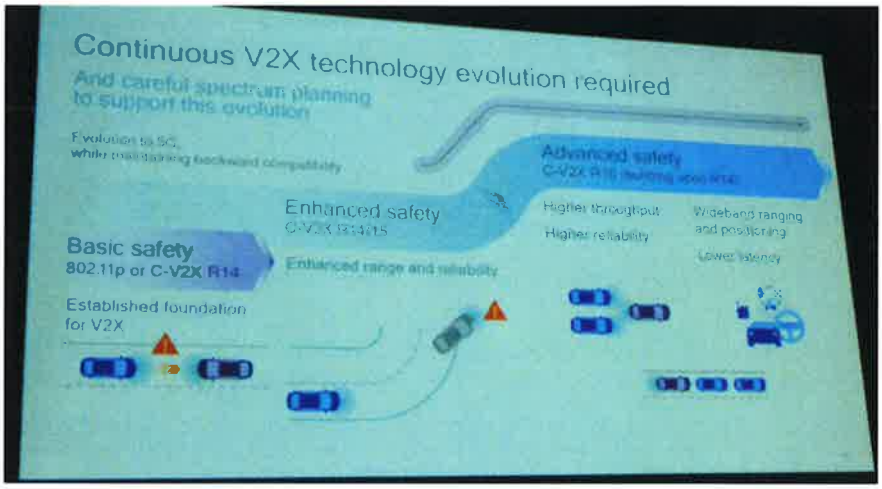
昨年のデイリーレポートが報じるITS2017の'大改革'

(C)2017 Koji Suginuma and Eizo Shimbun

セッション：LTE-V2Xは5Gを目指す（SIS35）

30日15時30分から開催された「5G Automotive Alliance (5GAA): On the Road Towards LTE-V2X」（SIS35）では、移動体通信業界が規格をまとめたLTE-V2Xについて詳細が説明された。技術開発を先導したQualcommのJim Misener氏は「C-V2X（LTE-V2Xの同社の呼称）は、携帯電話基地局を必要としない」という部分を強調した。「ITS用に割り当てられている5.9GHz帯を用いて、V2V、V2Iを直接行う」と、機器間が直接通信するものであることを強調した。「Cellular」の名称があることから、基地局経由であるとの誤解がいまだに存在することを念頭に置いている。C-V2Xは「LTEや5Gの規格化を行う3GPPで正式に決定され（リリース14）、今後機能拡張が行われ（リリース15）、5G技術の導入も進む（リリース16）」とした。





携帯電話地上設備大手であるEricssonのStefano Sorrentino氏は、ITSと他のサービス（例：エンターテインメント用の通信）に共通の技術を使うことで、コストダウンが図れることを利点とした。また、中国はDSRCではなくLTE-V2Xを採用したことも報告した。同氏は、シミュレーションの結果から、DSRC比75%増の通信距離が達成できるとして、優位な技術であると結論づけた。

Denso Automotive DeutschlandのTim Leinmüller氏は、検証に関する論考を述べ、「安全な通信システムを作る事と、通信システムを作る事は違う」と、多くの検証が必要なことを示唆した。

Ford Motor CompanyのJovan Gagajac氏は「以前は、V2Vを行える技術はDSRCだけだったが、Cellular技術はV2Vの要求仕様を上回るの能力を持った代替技術となった」と、LTE-V2X採用を強く示唆した。

(C)2017 Koji Suginuma and Eizo Shimbun

自腹でGO! 特別取材班　お得なレストラン情報

L'Entrecote St-Jean（レントレコット・サンジャン）

32ドルのセットメニューでヨーロッパの雰囲気が楽しめるステーキレストラン。

　メインはステーキとベジタリアンの料理のみ。ステーキは単品でも注文できるが、$32.75のセットメニューが断然お得。セットの内容はキャロットスープ、バターレタスとクルミのサラダ、ステーキ（170g）、デザート。ステーキの付け合わせはヨーロッパっぽくフライドポテトで、ソースもアメリカでは見ないマスタードソース。熱々スープもサラダもシンプルながら大変美味で、ステーキも結構柔らかい。焼き加減を聞かれるので、お好みの焼き加減を伝えよう。多くの人はMedium Rare（ミディアムレア＝中が割とまだ赤い）、Medium（ミディアム＝中がピンク）を注文する。

　セットメニューには含まれてないが、ワインはカラフェで出てくるハウスワインで十分美味しい。食後のコーヒーもセットメニューには含まれてないので、デザートにコーヒーを付けたい場合は別途注文する。デザートはプロフィトロールで、小ぶりのシュークリームにアイスクリームを詰め、チョコレートソースをかけたもの。あまり甘くなくてとても美味しいので、別腹を確保して是非どうぞ。

　お得で美味しいとあって、時間帯によっては混むので予約した方が安心である。予約はお店のウェブサイトから可能。

L'Entrecote St-Jean
2022 Peel St, Montreal, QC H3A 2W5
(514) 281-6492
http://www.lentrecotestjean.com
営業時間は毎晩22:30まで

Guy-Concordia駅からグリーンの地下鉄Honore-Beaugrand方面に乗り次の駅のPeel下車。
地上に出て徒歩約１分。Rue PeelとBoulevard Maisonneuveの交差点の南西のあたりに看板が見える。ホテルから徒歩でも　15〜20分ほど。

(C)2017 Koji Suginuma and Eizo Shimbun